

令和5年度

看護学部FD研究会報告書



自治医科大学 看護学部FD 評価実施委員会

## 2023 年度 看護学部 FD 研究会報告書

1. 日時：2024 年 3 月 11 日（月）13：00～16：00
2. テーマ：「ポストコロナの ICT 利活用状況を踏まえた学生のアクティブ・ラーニング推進のための教育方略の検討—今後想定される課題の抽出と対応策の創出—」
3. 対象：看護学部全教員、臨時教員、ティーチングアシスタント（TA）  
※臨時教員、TA は講義のみ参加、グループ討議は任意
4. 目的：わが国では、近年、教育デジタルトランスフォーメーション（DX）の推進等によって、学び続ける学習者を育てることが基本方針として掲げられている。本学でも、コロナ禍での遠隔授業の導入が追い風となり、ICT を活用した教育ツールが積極的に導入されてきた。ポストコロナ（ニューノーマル時代）における新たな学び方として、学習への生成 AI 等を含む ICT の利活用がさらに一般化するため、高等教育における教授方略も大きな転換を求められている。そこで、本研究会では、様々変化に対応しながら、アクティブ・ラーニングをより推し進めるため、想定される課題とそれらに対する対応策を検討した。
5. プログラム

時間	プログラム	担当
13：00～13：05（5分）	開会挨拶・講師紹介	長谷川委員長
13：05～14：10（65分）	講義「看護基礎教育におけるアクティブ・ラーニングと ICT の利活用」	大阪公立大学教授 真嶋由貴恵先生
14：10～14：20（10分）	休憩・会場配置変更	
14：20～15：20（60分）	グループ討議「アクティブ・ラーニングや ICT を使って どうにかしたいな、こんな看護教育上の問題 (ICT 利活用が一般化した時代に求められる看護系大学 教員の役割-教育上の課題と対応-)」	
15：20～15：45（25分）	討議結果の発表とフィードバック（1グループ3分）	
15：45～15：50（5分）	講評	真嶋由貴恵先生
15：50～15：55（5分）	総評	春山看護学部長
15：55～16：00	閉会・アンケート記入	

司会：川上委員

## 6. 当日参加者数

教員：39名/41名（95.1%） 臨時教員：5名/9名（55.6%） TA：0名/1名（0%）

※ 当日参加できなかった対象者には後日講演動画の視聴と本報告書の確認を案内

## 7. 研究会全体の進行状況および概要

前半の講義では、真嶋由貴恵先生から、看護学教育のDXとパラダイムシフト、アクティブ・ラーニングを推進するためのインストラクショナルデザイン、看護教育におけるICT活用の変遷等について教授いただいた。後半のグループ討議では、職位及び学科目混在で8グループを構成し、グループ討議形式で看護教育上の課題の抽出と対応策を検討した。具体的には、各教員が直面している教育上の問題点を抽出、KJ法で分析しながらカテゴライズし、アクティブ・ラーニングやICTを活用すれば解決できそうな問題点ひとつを選択して具体的な解決方法ディスカッションした。その後、各グループの成果を2分程度で発表し、発表が終了した別グループひとつに評価コメントをしてもらった（グループ討議の成果は別添資料参照）。

## 8. アンケート結果

1) 回答者数：39名/44名（回収率：88.6%、うち講義のみ受講者1名）

## 2) 結果の概要

## ① プログラムについて

・「講義」について					(n=39)
	①満足	②やや満足	③どちらでもない	④やや不満	⑤不満
回答数	19	14	4	1	1
%	48.7%	35.9%	10.3%	2.6%	2.6%
・「グループ討議」について					(n=38)
	①満足	②やや満足	③どちらでもない	④やや不満	⑤不満
回答数	32	5	1	0	0
%	84.2%	13.2%	2.6%	0.0%	0.0%
・「討議結果の共有」について					(n=38)
	①満足	②やや満足	③どちらでもない	④やや不満	⑤不満
回答数	28	8	2	0	0
%	73.7%	21.1%	5.3%	0.0%	0.0%

## ② 時間配分について

・「講義」について					(n=39)
	①短い	②やや短い	③ちょうどよい	④やや長い	⑤長い
回答数	6	18	14	1	0
%	15.4%	46.2%	35.9%	2.6%	0.0%
・「グループ討議」について					(n=38)
	①短い	②やや短い	③ちょうどよい	④やや長い	⑤長い
回答数	1	3	33	1	0
%	2.6%	7.9%	86.8%	2.6%	0.0%
・「討議内容の共有」について					(n=38)
	①短い	②やや短い	③ちょうどよい	④やや長い	⑤長い
回答数	1	2	34	1	0
%	2.6%	5.3%	89.5%	2.6%	0.0%

## ③ 今後のFD活動への有益性

					(n=38)
	①そう思う	②まあそう思う	③どちらとも言えない	④あまりそう思わない	⑤そう思わない
回答数	23	13	2	0	0
%	60.5%	34.2%	5.3%	0.0%	0.0%

## 3) 企画に関する意見や感想

- ・興味深い内容であったため、講義をすべて聞きたかった（事例についてやグループ討議の内容なども）
- ・もっと全体的に時間があると討議が深められると感じた
- ・他領域の職位の違う先生方と課題を共有しディスカッションすることで、斬新なアイデアが浮かび楽しかった
- ・とても役立つ内容だが、実現するにはたいへんだと感じた
- ・改めて ICT を活用した教育について考える機会となり、とても有意義だった
- ・新たな教授方法を枠にとらわれず考えることができた
- ・事前に PC が必要であると周知して欲しかった

## 4) 次回以降のテーマや企画等についての要望

- ・生成 AI の活用についてのハンズオンセミナー（実際に作成してみるなど）
- ・実習指導の効果的な方法
- ・ICT 教育について、継続して今回のテーマを深める（今後どうしていけるかという具体的な内容まで）
- ・学生が今まで受けてきた教育の概要と看護学を教授するうえで注意する内容について
- ・教員の働き方改革

## 5) FD 研究会の開催方法についての希望

	①対面	②遠隔	③ハイブリッド (講師は遠隔、教員は対面)	④どちらでもよい
回答数	25	1	2	11
%	64.1%	2.6%	5.1%	28.2%

(n=39)

## 9. 企画評価

## 1) 目的達成状況

講義に基づくグループ討議を通して、アクティブ・ラーニングをより推し進めるための想定される課題とそれらに対する対応策を検討するという本会の目的は達成できた。また、アンケートの結果によると対象者の満足度は高く、今後の FD 活動に有益であったとする反応が大多数であることから、本会の成果を実際の教育活動に活用することが期待される。

## 2) 今後の課題

本看護学部の Moodle を利用した教育活動においては、今回出された意見を基にして各教員が現実的に実践できる、より具体的な内容を検討していく必要がある。また、今回のアンケート結果から、継続して今年度のテーマを検討していきたいという意見が出されたことから、次回の企画につなげていくこととする。

## 2023年度 看護学部FD研究会 グループ討議 報告書

### ICT活用の現状と今後の展望

G	発表タイトルと内容	質問・気づき・コメント	真嶋先生の御講評	グループ 教員名
1	<p>タイトル：～評価は誰のため？教員のための評価になっていない？～</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・最終的な評価のみでなく、ICTを活用し課題を途中で一回提出させ、それに対しフィードバックを与えることで、最終的に学生が目標に到達できるような授業構成とすることを考えた。</li> <li>・調べ学習などの基礎的な内容は事前にICTを活用して学習させ、その後の演習などでは、看護の専門職である教員が、自分の経験をフルに活用し話し合いが深まるような授業構成としていくことがいいのではないかと意見が出された。</li> </ul>	<p>途中での評価をICTで評価することや、調べ学習をICTで分析することで、学生が自分の学習状況を可視化できるようになり、学習効果が挙がるのではないかと感じた。(8G)</p>	<p>ICT活用をどうするかについて話し合われており、評価は誰のためにするのかという点について検討されていたことが印象的だった。</p>	<p>春山教授 長谷川教授 小西講師 高崎助教 地神教員</p>
2	<p>タイトル：～ベストミックスを探す～</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・デジタルと学ぶのハイブリッド化のベストミックスを探していく。学生たちはデジタルネイティブであり、興味関心を持って講義・演習・実習に参加できる方法について話し合い、福岡女学院大学で取り入れている「ミッションタウン」という仮想の町のようなシステムを本学部でも取り入れてはどうかと考えた。演習などで取り入れてデジタルを上手く使いながら、アナログとして実習を行い、復習のためにデジタルに戻るといった、ハイブリッドな教育がいいのではないかと考えた。</li> </ul>	<p>学生が興味を持って学ぶ姿勢というものを育むことに対し、デジタルとアナログのハイブリッド化を目指すところといったご意見だったが、デジタルもアナログもどちらの大切さも伝えていくことが大切だと思った。(1G)</p>	<p>デジタルとアナログをうまく融合させてデジタルミックスをすることについて検討されており、他大学の取り組みを参考にし、その割合をどうするかなどを検討することが、デジタルミックスに近づいていくと感じた。</p>	<p>浜端教授 内堀教授 平尾准教授 上野助教 山岸助教</p>
3	<p>タイトル：～対面でのコミュカを高める～</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現在困っている問題点として、グループワークが活性化しない、カンファレンスへの発言を促す声かけが難しいというような意見が上がった。</li> <li>・第0段階として、話の内容を要約する教材を準備する、カンファレンスの前にアイスブレイクを充実させる環境作り、教員は評価する存在ではないことを示す環境作りを考えた。</li> <li>・第1段階として、今の学生は文字を活字として追うことに慣れている世代であり、カンファレンスの内容を書記ロボットを使用するなどし、意見交換しやすい環境を整えることを考えた。</li> <li>・第2段階として、カンファレンスの内容を見直す機会を作るため、他者の発言や自分の発言を振り返って、その中からベストコメントを選んでカンファレンスを通しての自分の意見を述べるとよいのではないかと考えた。</li> <li>・第3段階として、教員が入ることでオフィシャルな場となって学生が積極的な発言ができないことが考えられるため、ファシリテーターロボットなどを使用して教員はカンファレンスに入らないようにし、テーマがずれた時のみ遠隔操作をするといったことを考えた。</li> </ul>	<p>グループワークやカンファレンスでのより良い教育方法について、3段階に分け御検討いただいたが、その中でも特に印象に残ったのは、ファシリテーターロボットについてであり、それをどのように導入するのかについてすごく興味深く感じた。テーマがずれた時に適切にファシリテートできるように修正していくためには、プログラミングが大切だと思った。ファシリテーターロボットによって、学生が話しにくいと感じる環境を改善していけることはすごく興味深いと考える。(2G)</p>	<p>ファシリテーターロボットは、大阪大学の先生が自分の分身ロボットを作りすでに実施されているが、そういったものがあれば擬人化されて遠隔からでも指導できて良いのではないかと感じた。教員が良いのか、他のものがいいのかという点についてはご検討されるとよいのではないかと思う。</p>	<p>大塚教授 半澤教授 川上准教授 古島講師 高瀬助教</p>
4	<p>タイトル：～SNSの世界から現実世界へようこそ～</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・課題として、学生がカンファレンスなどで当たり障りのない感想のような発言が増えていることや、学生同士でもネットワーク作りや関係作りが得意ではないといったことが挙げられたため、ICTを使った対話力アップについて考えた。</li> <li>・対話の方法やルールについて、動画を活用し知識を与えてから学生間でプレゼンし対話の仕方を学んでいくという方法を考えた。</li> <li>・対話力を高めるために、一人のお題に対しみんなが同じ理解になるまで会話を繰り返すという、イメージを共有化するゲームを考えた。同世代のみならず高齢者や異世代間でも行うことで、学生の対話力を高める道筋をつけていけるとよいと考えた。</li> </ul>	<p>イメージの共有というところが今の現代の学生の課題であると感じた。自分たちのグループでも意見が出たが、対話力やコミュニケーション力について、一学年からどういう風に積み上げていくのかや、それらを高めるにはどうしていくかについては共通の課題であると感じた。(3G)</p>	<p>学生から発言がでない・当たり障りのない発言のみという状況について課題を感じられており、看護の現場では、SNS的な対応にならないよう、イメージを共有することはいいなと感じた。しかし、同じイメージにする必要があるかというところは疑問に感じた。現在は多様性の時代であるため、他者を尊重でききようなコミュニケーション能力がこれからは必要ではないかと思われるため、その点も検討されると良いと思う。</p>	<p>村上教授 川野教授 関山講師 石井講師 國野田助教</p>

G	発表タイトルと内容	質問・気づき・コメント	真嶋先生の御講評	グループ 教員名
5	<p>タイトル：～JST事前学習をして楽しむ～</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・技術の獲得について、教員が求めるものを学生が理解することが難しいという現状があり、伸び悩んでいる学生に焦点を当て、対応策について話合った。</li> <li>・それには事前学習の活用が大切ではないかと考えた。事前学習において動画を活用し、良いモデルと悪いモデルの比較といった、自分自身のメタ認知へつなげていく観察力を養うことがよいと考えた。</li> <li>・なかなか楽しく練習に取り組めない学生に対し、ゲーム的な要素も入れた比較の動画を用いることで、楽しく取り組めるのではないかと考えた。</li> <li>・何度も技術練習を行うことを通して、学生同士で動画を視聴し合うことで、うまくできたものを見てほしいという学生の承認欲求を活用してモチベーションにつなげていくとよいのではと考えた。</li> </ul>	<p>現在は、良いモデルのみの動画を観て学習していたところ、良いモデルと悪いモデル比較を比較するというのは、斬新なアイデアだと感じた。学生が視聴し比較をして話し合うことで、演習を楽しんでいることにつながるのではないかと感じた。また、自分のたちの動画を見て評価し合うことで、学生の承認欲求につながるという点が、学生のポジティブな学習として取り入れられるのではないかと感じ、とても興味を持てた。(4G)</p>	<p>技術演習で伸び悩んでいる学生を、グループ全体で引き上げていくことを検討しておられ、技術についてピアレビューするという視点は自分にはなかったため、新しいと感じた。自己肯定感が低い学生に対し、どう指導していくかがとても難しいと感じた。</p>	<p>小原教授 倉科准教授 青木講師 路川講師 飯島助教</p>
6	<p>タイトル：～誰でも積極的に参加できる/知的好奇心を刺激する～</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・課題として、学習者が思考をアウトプットできない、学習者個々の独自の意見を発することができない、能動的な学習を促す学習攻略が必要、という3つを挙げた。</li> <li>・学習者が思考をアウトプットできない課題に対し、まずはスモールグループからの話し合いを始め、その後、共有範囲を広げていくことや、入学時からThink aloud methodsを用いることで、自分の思考を発言していくことにつながると考えた。</li> <li>・学習者が意見を発することができない課題に対しても、入学時からThink aloud methodsを使い、ICT/Moodle上では、自分の意見を入力しないと他者の意見が見られない設定とすることを考えた。</li> <li>・能動的学習を促す学習攻略については、課題の解決型の学習に取り組むARCSモデルのA：注意や、R:関連性があるモノを使っていくとよいと考えた。また、医療現場での動画視聴を取り入れていくのもよいと考え、興味関心を引き出す学習だけでなく、書かせたり話をさせるといった教育者の能力も必要とも考えた。</li> </ul>	<p>ICTを活用していく中で、アウトプットすることは、学習の評価で大事な視点であると感じ、参考にしたいと思った。また、教育する側の能力については、授業などを学生が楽しそうにしていけないことが課題として挙げられていたため、その点についても考えていきたいと思う。(5G)</p>	<p>誰でも積極的に知的好奇心がでるような教授方法について検討されており、学生が思考をアウトプットしていける環境も作っていくことが大切だと感じた。</p>	<p>塚本教授 佐藤准教授 八木准教授 鹿野講師 二宮助教</p>
7	<p>タイトル：～ちょっと聞いてよAIくん～</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・わからないことがわからないといったことから、助けてと言いつけない学生がたくさんいることが課題と感じる。</li> <li>・相談のチャットボットやアプリを使って、学生が毎日のちょっとした内容を入力することによって、AIが反応してくれ、アドバイスをもらうようなことができるとよいのではないかと考えた。そういった行動を学生がとれるようになると、学生も楽になるし、教員も楽になるのではないかと考えた。</li> </ul>	<p>学生自身が、わかってないことがわからないんじゃないかということは、確かにその通りだと思う。学生が自分でいろいろ調べながら、自立して探求していく力や、解決方法を見出していく力を高めていくためには、チャットなどを使った相談などはとても価値のあることではないかと思う。(6G)</p>	<p>助けてと言えない学生が多いことについて、言えない環境なんだろうと感じるが、AIが対応し、最終的に「先生に聞いたほうがよい」というアドバイスを与えるというのは、斬新だと感じた。</p>	<p>永井教授 角川准教授 市川講師 佐々木講師 谷田部助教</p>
8	<p>タイトル：～見える化しない？複数科目の事前事後課題の重さなり具合～</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生が事前課題に取り組まないという現状や、課題量が多いこと、課題の提出期限が重なるといった問題を挙げた。</li> <li>・学生側のモチベーションを維持するために、学習成果を感じやすくなるよう、事前・事後課題の一体化といった、学習のつながりを意識できるような課題提示が必要と考えた。</li> <li>・教員側の対応として、Moodleカレンダーを利用し、学生の課題の量や提出期限などを領域を超えて見える化するとよいのではないかと考えた。また、教員がレポートを評価すると時間がかかってしまうため、負担軽減のため生成AIを用い評価をするとよいのではないかと考えた。</li> </ul>	<p>学生の課題の取り組み状況をよくしていくためには、学生のモチベーション維持が非常に重要なところだと思う。また、課題の提示については、領域をまたいで情報共有を行って、課題の内容や量、締め切り日を考えていくといったことは、ぜひやってほしいなと思う。(7G)</p>	<p>我々教員は、学生がどのくらいの課題をその時期抱えているかが見えていないが、それを一覧化し、他領域の教員と共有することで、学生の課題を集中させないようにするという考えは、とても斬新だと思った。教員間の縦のつながりだけでなく、横のつながりを大切にすることがよいと思う。</p>	<p>成田教授 島田准教授 渡邊講師 井上講師 沼野助教</p>